

第41号

● 目次 ●

巻頭言：東北アジアの国際ネットワーク戦略	1
菊地永祐教授最終講義「アカムシ（red worm）のマイクロエコロジー」	2
最近の研究会・セミナー等	3-4
センター新任教員・新メンバー紹介	5
客員教授紹介	6
最近のセンター出版物	6-7
活動風景	8
編集後記	8

巻頭言

東北アジアの国際ネットワーク戦略

東北アジア研究センター長 佐藤 源之

新年度よりセンター長を拝命いたしました。私は電波応用計測を専門とし、地中レーダ、リモートセンシングを専門としてきました。理系の立場での「東北アジア」とは、小雨・寒冷など地域に特有な環境における計測技術の応用、それを通じた新しい科学技術研究開発のための貴重な場と捉えてきました。これは従来の「地域研究」定義に即していません。それは「東北アジア」を研究していないからです。しかし、リモートセンシングという限られた分野でも、対象とする地域の環境で生きる人々や社会に着目しない研究は成立せず、そこに東北アジア研究センターに所属して研究することの大きな意義を感じています。新しい地域研究が何であるかは、引き続き私たちの大きな命題であり続けています。

本年度センターの方針として、次世代研究者養成と戦略的な国際ネットワーク構築という2つの重点項目を掲げました。本センターは学生定員を持たない研究所組織ではありますが、実際にはセンター所属教員は協力講座として、大学院学生の指導に当たっています。センターには学生居室が準備され、多くの学生が入り出りをしています。彼らをセンターの次の世代を担う有望な研究者として育て上げていくことは私たちの責務です。東北アジア研究センターはこれまでの努力によって東北アジアの各地域での知名度が向上してきていることを実感しています。国外におけるセミナーの開設、集中講義の実施など、センターの特徴を活かした取り組みを積極的に支援したいと考えています。

一方国際交流として、本センターでは4つの大学間交流協定を世話部局として進め、12の部局間交流協定を締結



長春・吉林大學に勤務する卒業生と共に
(左から2人目が佐藤源之)

しました。更に50名以上の客員教授をはじめ多くの外国人研究員、留学生の受け入れを行ってきました。こうした実績もセンターが戦略的な国際ネットワークを構築していくための財産です。本センターと交流を持つこれらの機関、研究者と共同で、東北アジア地域における研究活動の場を着実に広げていきたいと考えています。東北大学では本年度、全学としてロシア科学アカデミーとの共同研究を推進する方針を定めました。これは私たちがロシア科学アカデミー・シベリア支部と築き上げてきた研究交流実績や、シベリア連絡事務所の運営を十分評価したものと捉え、センターとしても新しい活動に取り組んでいく所存であります。

菊地永祐教授最終講義 「アカムシ(red worm)のマイクロエコロジー」

菊地永祐先生の最終講義が、「アカムシ (red worm) のマイクロエコロジー」と題して、2009年3月10日に東北大学川内キャンパスマルチメディア教育研究棟6階大ホールで行われました。

菊地永祐先生は、昭和43年3月東北大学理学部生物学科を卒業し、同年4月東北大学大学院理学研究科修士課程生物学専攻に入学、昭和45年3月同課程を修了、同年4月同研究科博士課程に進学、昭和47年2月に同課程を中退し、同年3月に東北大学理学部に文部技官として採用され、翌年6月に同学部助手に昇任しました。更に昭和53年5月東北大学理学部講師、昭和58年4月同助教授に昇任し、平成7年4月東北大学大学院理学研究科に配置換えされた後、平成9年12月東北大学東北アジア研究センター教授に昇任し、地域生態系研究分野を担当し、ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所と共同研究を行い、西シベリアの湖沼などの水界生態系の食物網に関する研究に顕著な業績をあげてられました。また、東北大学赴任以来、理学部生物学科の教育に従事し、昭和53年5月より大学院理学研究科生物学専攻、平成13年4月より大学院生命科学科生態システム生命科学専攻を担当して現在に至り、このたび平成21年3月末にめでたくご定年を迎えられました。

最終講義は、学生時代から始められた水田のイトミミズ、その後河口域の研究を始めてそこにおける干潟のゴカイ類、東北アジア研究センターに赴任する頃から取りかかった湖沼生態系のユスリカ幼虫など、それぞれの生物の体が赤いことからこれらを「アカムシ」と呼んで、これまでの研究成果についてわかりやすくお話になりました。

まず、水田生態系について話を始めて、水生土壌動物であるイトミミズが、その土壌攪拌作用により、植物種子を埋め込み、土壌微生物の活性を高め、土壌表層にある酸化層を破壊して、田面水と土壌間の物質循環を速めることで動・植物プランクトンの生産を高めるなど、水田の相互作用系において中心的働きをしていることに



最終講義をする菊地永祐先生

ついて説明されました。この研究は底生動物の攪拌作用（バイオターベーション）の先駆的な研究としても、高く評価されています。

つぎに、河口域生態系について、イトゴカイやカワゴカイなどの生物の河口ラグーンの物質収支や物質循環における役割や、また炭素と窒素の安定同位体比の解析から生物の餌や有機物の起源とその挙動について、さらにゴカイ類の食べ方や巣穴の形態などの生活様式と生息環境の重要性について紹介されました。

三番目の話題として、世界的にも強酸性の湖水で有名な宮城県大崎市の火山性湖・潟沼（かたぬま）のサンユスリカや、ラムサール条約登録地の宮城県栗原市と登米市にまたがる伊豆沼のオオユスリカについて、炭素と窒素の安定同位体比による分析からこれらのユスリカ幼虫がどのようなものを食べているか、また食物連鎖を通じたエネルギーの流れや物質循環における役割についてお話になりました。

このように対象となる生態系や生物は異なりますが、水と土の境目で巣穴を作り生息する「アカムシ」による環境への働きの重要性を強調され、最終講義を締めくくられました。

（鹿野秀一）



最近の研究会・セミナー等



東北アジア・アフリカ・北極圏の牧畜民に関する国際会議

2009年5月15日～18日にかけて、東北アジア研とラップランド大学北極センターの共催で、国際会議「北極・アジア・アフリカの遊牧社会における動物の社会的意義」が開催された。この会議はプロジェクト研究「シベリア人類生態」ユニットの活動の一つであり、また客員准教授として滞在中のフロリアン・ステムラー氏の協力の下に運営された。

シベリア先住民文化の研究においてトナカイ牧畜文化は重要な意味をもつ。とりわけ現在のロシアにあっては人口的に極小の先住民が、市場的なメカニズムの下で、広大な自然空間を利用する形でトナカイ牧畜を営んでいる。その社会的・生態的な基盤は極めて脆弱であり、石油ガス開発や地球温暖化の影響が強く反映される社会領域だからである。こうしたトナカイ牧畜の文化的・生態的理解を深化させるために、スカンジナビア極北、シベリア、モンゴル、東アフリカの牧畜民社会の比較を試みた。それぞれの地域・民族社会の人-動物関係を掘り下げることで、単なる食料生産としてだけではなく、宗教や社会システムや紛争を含む政治、さらに環境との関係において牧畜を再考するのが趣旨であった。

この会議の副題には「日本-フィンランド学術セミナー」とあるように、国内からは発表者が8人、フィンランドからは8名（内一人は論文参加）だった。文化人類学者がもっと多かったが、社会学者、ウシの遺伝学者、科学と社会をつなぐアーティストも加わるなど学際的構成となった。また東京や名古屋からも含めて来場者があり、合計で25名ほどの参加者で、広範で刺激的な議論が展開された。

15日は歓迎夕食会、そして16～17日の本会議の発表内容は以下の通りである（会議言語は英語、以下の発表題目は高倉私訳）。①フロリアン・ステムラー／牧畜社会の動物多様性と北極牧畜の位相、②池谷和信／二つの牧畜集団カラハリとチュクチの動物の社会的意義、③曾我亨／北ケニア・ガブラにおける長子の意義とラクダ信託システム、④ヌッチョ・マズーロ／フィンランド・サーミのトナカイの社会的意義と合理化された牧畜経済、⑤湖中真哉／ケニア・牧畜民サンプルのメタファと認知シ

ステム、⑥アンナ・ステムラー＝ゴスマン／ヤクーチア・サハにおける動物の政治性、⑦テルヒ・ブオヨラ／フィンランド・サーミにおけるトナカイの調教、⑧高倉浩樹／動物への親密度を差異化する戦略：北極牧畜＝例外主義への反論、⑨中村知子／モンゴルにおける家畜の文化経済価値、⑩佐々木史郎／西シベリア・ロシア極北部ツンドラ・ネネツのトナカイ飼養の拡大、⑪吉田睦／西シベリア・ツンドラネネツの私有トナカイへの「民族」放牧、⑫ユハ・カントネン／DNA分析からみたヤクート牛の起源と遺伝的多様性、⑬レオ・グランベルグ／移行期ロシアの極北一農村での動物飼育の社会的多様性と持続可能性、⑭ティア・ビルタネン／カメルーン・ポロロの牛と社会的意味とジェンダー、⑮アヌ・オスヴァ／共生的ヒト-動物関係：ヤクート牛研究へのアートとしてのアプローチ、⑯太田至／総括コメント。

本会議終了後の18日は東北大学農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター（農場）を訪問した。ここでは黒毛和牛だけでなく、日本短角種という在来種が飼育されており、かつ夏の間は山地放牧されているのが特徴である。受け入れには農学研究科陸圏生態学研究室の小倉振一郎准教授に対応いただき、農場の歴史や同分野の研究内容を含め、畜産学や放牧地生態に関する研究交流も行った。

（高倉浩樹）



本会議終了後の記念撮影

東北アジア研究センター第一回人類学セミナー

センター内の人類学者および関連各種研究員や院生（環境科学・環境社会人類学分野）が中心となって、東北アジア比較民族誌さらに、フィールドワークの方法論や人類学理論等に関する研究会を開催することとなった。第一回は、2009年4月13日午後4時半からセンター大会議室において、東北学院大学准教授の梅屋潔氏による

報告「二つの政権を表象する人格と妖術-ウガンダ・パドラにおけるPostcolonial Elitesの事例」が行われた。調査における人々の語りや歌などの言説のデータ化に関する方法や、宗教研究と現代アフリカ史の位相について活発な討論が行われた。

（高倉浩樹）

極東ロシア研究会

2009年5月23日（土）、東北アジア研究センター会議室において「ロシア帝国とソヴィエト連邦構成下のロシア極東」と題したセミナーが開かれた。センター客員教授を務められていたニーナ・ドゥビーニナ教授（極東国立人文大学、本ニューズレターの客員教授紹介欄を参照のこと）が、このテーマに沿って「ロシア帝国における極東の総督府」、「ソ連極東とIa.B.ガマルニク」という二本の報告を行い、慶応義塾大学法学部教授横手慎二氏がそれについてコメントし、最後に参加者全体で討論した。19世紀半ばに中国からプリアムール（沿アムール）地方、沿海地方を獲得したロシアは、東シベリア総督にシベリア以東すべてを委ねることに無理があると判断し、1884年にハバロフスクにプリアムール総督府（その管轄下にはカムチャツカ、サハリン、チュコト半島、オホーツク、沿海地方、アムール地方を含む広大な領域が含まれた）を設置した。これがいわゆる「ロシア極東」の始まりを画すが、ロシア革命までの30年余りの間に8人が務めたプリアムール総督のうち、ドゥビーニナ教授は特にゴンダッチ、グロデコフ、ウンテルベルゲルという3人に焦点をあて、最近10年間に相次いで出版した彼らの伝記を通して、極東ロシアの歴史を描き直すという作業に取り組まれてきた。ロシア極東の開発、発展に貢献した人物、しかも先生が共感を覚える人物がきわめて魅力的に描かれている。ソ連時代の歴史学ではイデオロギーに制約され、想定できなかった手法である。

このプリアムール総督の研究を総括し、帝政時代の総督制度とは何であったのか、特にその極東統治の特色とは何であったのかについてまとめたのが最初の報告の趣旨であった。ドゥビーニナ先生が報告で強調されていたのは、人格をもった人間、特に「決定を下す人間」の歴史において果たす役割であり、未知の文書を利用し、客観性を維持しながら、共感を抱く人物を描くことを通して、先生の場合は極東ロシアという地域の歴史を振り返ろうとしたということである。先生が共感を抱いたプリアムール総督たちは、これまでステレオタイプの描かれてきた帝政時代の尊大で横暴な役人ではなく、教養が高く、多民族国家ロシアの特徴である民族問題にも敏感で、私利私欲にはほど遠く、国や国民のために尽力した人物たちであった。

もうひとつの論点は、「極東」というロシア中央から最も離れた場所がいかに統治されていたのか、という問題である。コサックを含む軍のトップも務めていながら、総督には財政的な基盤がなく、省庁の出先機関が中央と直結していたため権限に限度があったが、シベリア鉄道の建設や日露戦争、ストルィピン首相の理解などを背景に極東発展の基礎は作られたという。

ドゥビーニナ先生はここ数年、この三人の総督同様に、革命後のソ連極東の統治において大きな役割を果たしたガマルニクという人物の伝記執筆に精力を傾けられ、仙台滞在中の三ヶ月間も集中的に資料を読んでおら

れたが、彼についての評価の骨子を語られたのが二本目の報告である。ガマルニクはウクライナで革命に参加し、干渉戦争と極東共和国のロシアへの併合後に極東地方へ派遣され、とくに1920年代にその発展に大きな貢献をした人物である。その後、1930年代にはモスクワでソ連国防人民委員代理（国防次官にあたる）、労農赤軍政治局長として赤軍の近代化に尽力したが、極東を離れても毎年のように同地方を訪れ、特に極東地方の国防問題について最も事情に精通した人物として、スターリンの主要な助言者、相談相手であったというのがドゥビーニナ教授の見立てである。ソ連にとっては悲劇的な1937年に多数の軍幹部も粛清されたが、ガマルニク自身は自ら命を絶った。

この報告に対して横手氏は、3人の総督の評価の違い、日露戦争時に設置された極東太守制度のあり方、中央と地方の関係に関する帝政・ソ連・新生ロシア時代の相違などについて質問し、さらに全参加者も加わって議論が続いた。いわゆるロシア極東が、中国、日本、朝鮮半島を中心とするこの地域に今日のような形で参入することで、今日の東北アジアの枠組みが形成されてわずか150年しかたっていないが、基本的な地政学的状況は不変なため、ロシア側の視点からこの地域の過去を振り返ることも、東北アジア地域の現在、将来を考える多くのヒントが潜んでいるように感じた。

セミナーはすべてロシア語で行われ、日本在住のロシア人研究者2名も参加した。懇親会でも議論は続き、有意義で充実した研究会であった。ドゥビーニナ先生には、ガマルニク伝の早期の刊行を願わずにはおれない。なお、ドゥビーニナ先生が執筆されたプリアムール総督三部作については、来春刊行される『東北アジア研究』14号に、詳しく内容を紹介する文章を寺山が投稿する予定なので、参考にさせていただきたい。

（寺山恭輔）



前列左から二人目がドゥビーニナ先生

◆ センター新任教員 ◆

大窪 和明



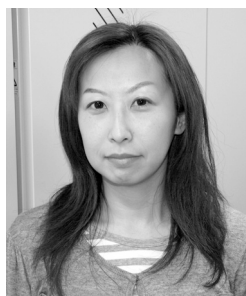
2009年4月1日より東北アジア研究センター地域計画科学研究分野の助教として着任いたしました。前年度までは、東北大学大学院情報科学研究科の博士課程に在籍し、土木計画学を学んできました。土木計画学は、社会インフラの計画策定、評価、実施のための理論を体系化するための学問とされ、これまで経済学をベースに統計学や数理計画法の手法を活用することによって発展してきました。しかしこれからは経済学だけでなく、人々に関わる様々な研究分野の成果を取り入れて発展していく必要があると感じています。東北アジア研究センターは様々な研究分野の専門家がいます。私はこれから本センターの皆様から様々なことを学ぶことによって、これまでと違った新たな観点からの研究が展開できることをとても楽しみにしています。

これまで私は、古紙や鉄スクラップといった再生可能資源を取引する市場の変動メカニズムの解明を行ってきました。再生可能資源の発生量は、使用済み製品の排出量に依存し、リサイクル企業の生産計画とは無関係に発生するという特徴もっています。このような状況下において、再生可能資源を取引する市場では価格や取引量の変動が大きく、リサイクルの促進に悪影響を与えていたことが、先進国各国において報告されています。私は、日本の古紙、鉄スクラップ市場を対象に、市場の変動をモデルによって表現し、その原因の解明を行いました。また、再生可能資源が複数の取引業者および市場を経てリサイクルされていることに着目し、一つの市場で起きた変動が取引業者の行動を通じて、その他の市場に伝播する構造のモデル化を行い、その性質を解明しました。

今後は、リサイクル企業の施設配置も含めた静脈物流システムの研究を通じて、日本の高度なリサイクル技術と中国やシベリア地域の豊富な天然資源がどのように関わっていくべきかについて示唆が得られるような研究を展開していく予定です。

◆ センター新メンバー ◆

木曾 恵子



2009年4月から教育研究支援者として勤務している木曾恵子です。「東アジアにおける移民の比較研究ユニット」の支援業務を行っております。本ユニットは、東アジアを中心とする地域へからの移民をめぐる状況を、世界各地の移民のそれと比較するなかで、移民のメカニズムに関する共通性や差異を見出し、日本社会における多文化共生の実現に必要な実践や施策を模索しようとするものです。現在は主に、実践や専門分野が異なる専門家同士の対話を目的とする研究会を実施しています。また東北地方における国際結婚をめぐる問題など、具体的なテーマに関する情報収集や整理も進めており、今後はその情報に基づいたフィールドワークを随時行っていく予定です。

私の専門は文化人類学で、経済のグローバル化を背景に増大した女性による労働移動が、移動者やその家族、送り出し社会に与える影響について関心があります。具体的には、東南アジア・タイの東北地方農村でのフィールドワークから、1970年代以降の同地の女性による移動の変遷を家族との関わり合いのなかで実証的に検討し、女性たちのライフコースにおける仕事観の変容や世代間の差異、近年増加している出稼ぎをする娘の代わりに祖父母が孫を養育する「孫育て」などに現れる同地の女性労働をめぐる現代的な問題を考察しています。

秋田生まれの仙台育ちで、私自身がこの10年程は神戸、タイ、京都を点々とする移動者でもあります。新しい出会いを重ねるなかで再び仙台で勤務することとなりました。東北アジア研究センターに勤務して以来、日常生活やユニット研究の場で、他分野、他地域の研究者の方々と有意義で楽しい議論を重ねることができ、これまでとは全く異なる形で多くの学問的刺激を受けています。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

◆ 客員教授紹介 ◆

ニーナ・ドゥビーニナ教授

本年4月から6月までの3カ月間、客員教授を務められたニーナ・ドゥビーニナ教授は、新潟から飛行機で2時間足らずのロシア連邦ハバロフスクの極東国立人文大学教授である。モスクワ近郊に生まれ、独ソ戦のさ中には接近するドイツ軍が投下した爆弾が落下するのを目撃されたそうである。戦後、ソ連の最高学府モスクワ大学の歴史学部を卒業された。1年先輩の法学部にはゴルバチョフが学んでおり、エリツィン同様スターリン死後に社会に出て活動を開始した世代に属する。現在に至るまでロシア人の多くが生活を望む特権都市モスクワでの暮らしを捨て、先生は御自分の意思で最果ての町、極東のコムソモリスク・ナ・アムールで教鞭をとり始めた。その後ハバロフスクに移り、現在も大学院生を数人抱えながら教育と研究に励まれている。

研究内容については、本ニューズレターの研究セミナーの欄をご覧いただきたいが、ロシア極東地方の発展に貢献した魅力的な人物の伝記をいくつか執筆されている。先生の世界観、人柄も対象とする人物に反映されているといえよう。

ハバロフスクに戻ると授業や大学院生の指導で忙しく、図書館に通って文献を探すのに時間もとられるということで、3ヶ月間という短い時間であったが、この自由な時間を利用して仙台では精力的に本を読み、ノートをとり、そして今までの史料と突き合わせて、新著(ガマルニクに関するもの)の相当部分を書きあげられた。仕上げのためにモスクワの史料館で追加的に史料を収集されるとのことだが、この新著を紹介する時が

遠からず実現することを期待している。本来の御研究のほか、対独戦争時に極東から出征し、戦死した人々の名簿の刊行を中心になって支えられた。来年、第6巻の刊行をもってこの事業も終了される予定とのことだ。このような活動が教育、研究とともに評価され、ロシア文部省からは数少ない名誉功労者の称号も授与された。

先生とは、研究内容にとどまらず、現在のロシアや極東の状況、ソ連時代の裏話などについて毎日お話を聞く機会に恵まれ、非常に有益な時間を過ごすことができた。ますますのご活躍をお祈りする次第である。

(東北アジア研究センター 准教授 寺山恭輔)



2009年5月 蔵王お釜にて



最近のセンター出版物

○東北アジア研究 第13号 2009年3月

本誌は東北アジアを対象とした地域研究の学術雑誌で、東北アジア研究センターから毎年1回刊行されている。投稿・執筆者はセンターのスタッフが中心であるが、センター関係の研究者に開かれており、投稿論文には査読審査が行われる。

本13号には、学術論文7編と資料紹介1編が掲載されている。(栗林均)

○東北アジア研究シリーズ(和文)

・10号 東北大学東北アジア研究センター・シンポジウム 内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」－モンゴルと華南の視座から－ / 岡洋樹 編 2009年3月

本書は、2007年3月に開催された本センター・シンポジウムの報告論文集である。このシンポジウムは、中国の少数民族のアイデンティティーや存在様態が多数派民族

である漢族との関係において有する特色と、文化人類学・歴史学においてそれがいかに取り扱われるべきであるのかについて議論したものである。「華南セッション」「モンゴル・セッション」に提出された論文6篇と、コメント2件を収録する。(岡洋樹)

・11号 帝国の貿易 18～19世紀 ユーラシアの流通とキャフタ / 塩谷昌史 編 2009年2月

本書は、2008年3月7日に東北アジア研究センターで開催されたシンポジウム「帝国の貿易—18～19世紀ユーラシアの流通とキャフター」の報告書である。19世紀末まで露清貿易の中継拠点がキャフタにあり、モスクワからキャフタを経て北京に、あるいは、北京からキャフタを経てモスクワに商品が送られた。シンポジウムでは、ロシア史、モンゴル史、中国史の研究者を招聘し、商品と商人という観点からキャフタ貿易を検討した。

(塩谷昌史)

○東北アジア研究シリーズ（外国語文）

- ・10号 モンゴル史研究の新動向、当面する課題（17～20世紀初頭）（モンゴル語文）／チョロロン・ダシダワー、岡洋樹 編 2009年3月

本書は、2007年9月、モンゴル国ウラーンバートル市においてモンゴル科学アカデミー歴史研究所（チョロロン・ダシダワー所長）との共催で開催された同名のシンポジウムに提出された報告論文集である。このシンポジウムには、モンゴル、日本、中国、ロシアから研究者が参加し、主として清朝支配時代のモンゴル史に関する最新の研究成果・情報を報告、討論した。本書には当日の報告から17篇の論文を収録している。モンゴル語による刊行。（岡洋樹）

○東北アジア研究センター叢書

- ・32号 1930年代ソ連の対モンゴル政策 — 満洲事変からノモンハンへ / 寺山恭輔 著 2009年3月

本書はスターリンを中心とするソ連指導部による、1930年代の対モンゴル政策をまとめたものである。この時期、モンゴル東部では1931年の満洲事変により翌年「満洲国」が作られ、1939年には同国との国境ノモンハンで本格的な武力衝突に発展した。辛亥革命後の中国から独立宣言したモンゴルに、対日防衛の前線としてソ連が触手を伸ばし、軍事的・経済的にも勢力を浸透させていった過程を、主として政治局文書をたどることによって初めて明らかにした。（寺山恭輔）

- ・33号 『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙 / 栗林均 編著 2009年2月

『元朝秘史』は、チンギス・カーンの一代記を中心としたモンゴルの歴史書で、14世紀にモンゴル語を漢字で表記したものが現代に伝わっている。本書は『元朝秘史』に用いられているすべてのモンゴル語の単語の索引である。見出し語はモンゴル語の単語のローマ字転写形で、すべての単語に対して出現回数と出現位置を示し、それぞれの出現位置における原文の漢字表記、漢語訳を付した。全538頁。（栗林均）

- ・34号 自己言及的民族誌の可能性 / 李仁子・金谷美和 編、鈴木健太郎・増田和也 編集協力 2009年3月

本書は、“Writing Culture”等の著作によって日本の人類学が過度な反省に陥っていた時期に学生時代を過ごした同世代の文化人類学者らが、十有余年のフィールドワークを世界各地で実践してきた今、その経験を振り返りながら、フィールドワーカーである自己の背景や、現在の位置取り、フィールドとの関わりなどについて自己言及的に再考した試みである。出自や文化的経験がそれぞれに異なる執筆者たちの論文と、その執筆者による本音を語り合った座談会には、まだ荒削りながらも、フィールドワークにあくまでこだわる文化人類学の新たな可能性があらわれている。

（教育学研究科准教授・李仁子）

- ・35号 東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究 成果報告書 / 工藤純一 編 2009年3月

本書はセンター共同研究「東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究」の成果報告

書である。参加した文系研究者の研究対象範囲が狭く限定しているためにノアデータの活用には向かなかったが、シベリア極東の森林火災の影響と黄砂現象の観測には大きな成果を得た。

本書ではノアデータを利用した大気汚染抽出の概要を解説し、2007年12月から2008年2月までの期間で得られた解析事例をカラー画像で紹介している。（工藤純一）

- ・36号 ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第4集 / 平川新監修、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子 編 2009年3月

本書はロシアに存在する日本関係史料の翻訳史料集である。1795年から1805年までの16年間の史料66点を収録した。1794年にアリューシャン列島に漂着し、ロシア人狩猟者に保護されてイルクーツクで生活した石巻若宮丸漂流民と、彼らを1804年に日本に送還した第2回遣日使節レザーノフに関する史料が中心である。本シリーズによって日露関係史の研究が飛躍的に進展しつつある。

（平川新）

○東北アジア アラカルト

- ・20号 ロシアの北太平洋進出と日本—『ロシア領アメリカの歴史』より— / 斎藤由佳・前田ひろみ 翻訳 寺山恭輔 編 2009年3月

本書は「露米会社」設立200周年を記念して、ロシアで1999年に出版された3巻本の「ロシア領アメリカ史」のうち、特に若宮丸乗組員とともに訪日したレザーノフ使節団と世界就航船に関する部分を中心に、18世紀終盤から19世紀初頭に関係する5つの章を訳出したものである。北米大陸をめぐるヨーロッパ列強の国際関係、露米会社の形成、毛皮貿易をめぐるロシア商人の競争、アラスカのロシア植民地の状況などについても詳しく知ることができる。（寺山恭輔）

- ・21号 シベリア通信2 2004年—2008年 / 徳田由佳子 編 2009年3月

2004年10月に出版されたアラカルト第12号『シベリア通信 2000—2004』の続編。在ノボシビルスク東北大学東北アジア研究センターシベリア連絡事務所の駐在員による月刊現地レポート。ロシア科学アカデミーシベリア支部の動向から人々の生活まで、バラエティーに富んだ内容でシベリアの首都を紹介する。本号では東北アジア学術交流懇話会に配信された会員用メールマガジン2004年6月号（51）から2008年3月号（96）までを収録。

（徳田由佳子）

- ・22号 新技術開発ダイジェスト2 2004年—2008年 / 徳田由佳子 編 2009年3月

新技術開発ダイジェスト2 2004年—2008年（2009年3月）

2005年4月に出版されたアラカルト第14号『新技術開発ダイジェスト 2001—2004』の続編。ロシア科学アカデミーシベリア支部のプレスグループが発行する、ロシアの全国紙・地方紙のスクラップブック『プレス・ダイジェスト』の中から技術開発に関する記事のみを抜粋、翻訳した情報資料。本号では東北アジア学術交流懇話会に配信された会員用メールマガジン2005年1月から2008年12月分までをカテゴリー別に編集し収録。

（徳田由佳子）



モノづくりの道具—『元朝秘史』の研究

栗林 均

一昨年（2007年）は、盛岡藩出身の東洋学者那珂通世（なかみちよ）博士が『成吉思汗實録』を上梓してから百年目の年であった。『成吉思汗實録』は、13世紀にモンゴル帝国を築いたチンギス・ハン（成吉思汗）の一代記を中心に、モンゴル族の祖先からオゴダイ・ハンまでの事績を伝承と韻文を織り交ぜて記録したモンゴルの歴史書で「モンゴル秘史」とも呼ばれる。その冒頭に、「上天より命ありて生まれたる蒼き狼ありき。その妻なる惨白（なまじろ）き牝鹿ありき。」という幻想的なモンゴル族の始祖伝説が始まる。これが井上靖の小説『蒼き狼』のタイトルになったことは周知のとおりである。

「モンゴル秘史」は、13世紀の著作と考えられるが、現存するのは14世紀末に漢字の音をもってモンゴル語を表記したもので、漢語で『元朝秘史』と題されている。漢字でモンゴル語を表記するやり方は、漢字本来の意味に関係なく、その字音を使ってモンゴル語の音節を表記するもので、これは日本の万葉仮名と同じやり方である。

モンゴル語を表記するのに漢字を用いたのは、当時モンゴル族が文字を持たなかった為でもなく、モンゴル族が表記に漢字を用いていた為でもない。それは、元朝に替わって中原を支配した明朝の翻訳官らが、モンゴル語を学習・教授するために宮廷の書庫に蔵されていた「モンゴル秘史」をテキストとして、モンゴル語の発音をすべて漢字で表記し、漢語による逐語訳と要約を付してできたものであった。同じ時期に同じやり方で『華夷訳語』というモンゴル語の語彙集と文例集も編纂されている。

那珂博士は『支那通史』（1888年～）を執筆中に、古代から元代至り、その資料の乏しさに頓挫していた折、中国に滞在していた内藤湖南博士から『元朝秘史』を送られ、僅かな文法書と辞書を手がかりにモンゴル語を独習して全訳と注釈を完成させた。これがすなわち『成吉思汗實録』であり、世界で最初の『元朝秘史』のモンゴル語からの外国語訳となった。

日本のモンゴル学はこのような基礎の上に成立し、その輝かしい伝統を継承してきた。筆者は、このような『元朝秘史』を言語学・文献学の観点から研究している。2001年に本センターから出版した『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』（954頁）は、漢字表記モンゴル語原文とそのローマ字転写を見開きで対照し、ローマ字転写の本文データに基づき、コン

ピュータによって作成したモンゴル語の全単語・全語尾の索引である。

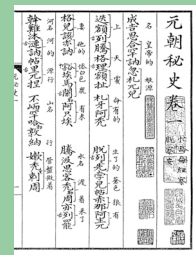
また、2003年には、これと同じ方針と方法で『「華夷訳語」モンゴル語全単語・語尾索引』（xxiv + 178頁）を出版した。

さらに、本年（2009年）出版した『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』（538頁）は、『元朝秘史』のモンゴル語の全単語索引に、原文の漢字表記とそれに対する漢語の訳語を付したものである。

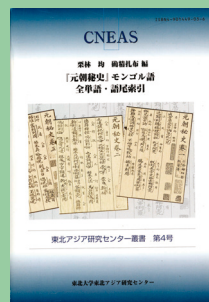
モノづくりの匠たちは、新しいモノを作る際に、目的に合った道具を自作するという。これらの著作は、まさに筆者が『元朝秘史』のモンゴル語を研究するための必要に迫られて自作した道具類に他ならない。これまでに『元朝秘史』と『華夷訳語』のモンゴル語と漢字の使用について発表した筆者の一連の論考は、これらの道具類なくしては成り立たなかったものである。それらは、筆者の研究にとって手放せないものであるが、望むらくは他の研究者にとっても使い勝手のいい工具として役に立つことを願っている。



『成吉思汗實録』（1907年）中扉



『元朝秘史』の本文



『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』（2001年）



『「華夷訳語」モンゴル語全単語・語尾索引』（2003年）



今年度から、年4回刊の本ニューズレターは各号とも今までより1ヶ月早く刊行することになりました。今号は何かお盆休み前に刊行することができ、一安心しております。各位のご協力に感謝いたします。（柳田賢二）